

【今年度の結果と取組みについて】

○●国語●○

(領域ごと)

- | | |
|------------------|---------------|
| ①言葉の特徴や使い方に関する事項 | やや課題が残る結果であった |
| ②A話すこと・聞くこと | 概ね良好な結果であった |
| ③B書くこと | やや課題が残る結果であった |
| ④C読むこと | 概ね良好な結果であった |

(問題形式)

- | | |
|------|---------------|
| ①選択式 | 概ね良好な結果であった |
| ②短答式 | やや課題が残る結果であった |
| ③記述式 | 概ね良好な結果であった |

(無解答率)

課題が残る結果であった

(その他)

もっとも正答率が高かったのは「話すこと・聞くこと」の領域で、「必要なことを質問し、話し手が伝えたいことや自分が聞きたいことの内容を捉える」設問である。一方で、もっとも正答率が低かったのは「書くこと」の領域で、「文章に対する感想や意見を伝え合い、自分の文章のよいところを見付ける」設問である。

無解答率が高かったのは「言葉の特徴や使い方に関する事項」の領域で「学年別漢字配当表に示されている漢字を文の中で正しく使う」設問で短答式の問題である。選択式の問題は概ね無解答率が低かった。

分析

全体的におおむね良好な結果であった。「A話すこと・聞くこと」「C読むこと」の正答率が高かった。全国の平均をやや上回る結果となった。

一方で、「言葉の特徴や使い方に関する事項」の領域で、「学年別漢字配当表に示されている漢字を文の中で正しく使う」ということに課題が残った。その中でも、「録画」と熟語で書く設問の正答率が低く、「画」は解答することができているが「録」と書くことができていないが解答が多く、漢字の意味を理解し、熟語として使うことが難しい様子であった。今後、日頃の漢字学習を見直し、定着を図っていく必要がある。

無解答率はどの設問において全国平均よりも高く、課題が残る結果となった。問題形式に限らず、後半の問題で無解答が目立ったので、問題を理解する力や、最後まで問題に取り組む姿勢を養っていく。

〇●算数●〇

(領域ごと)

①A数と計算	概ね良好な結果であった
②B図形	概ね良好な結果であった
③C測定	概ね良好な結果であった
④C変化と関係	良好な結果であった
⑤Dデータの活用	良好な結果であった

(問題形式)

①選択式	良好な結果であった
②短答式	概ね良好な結果であった
③記述式	概ね良好な結果であった

(無解答率)

概ね良好な結果であった

(その他)

もっとも正答率が高かったのは「数と計算」の領域で、「 1050×4 を計算する」設問である。一方で、もっとも正答率が低かったのは「変化と関係」の領域で、「果汁が含まれている飲み物の量を半分にしたときの、果汁の割合について正しいものを選ぶ」設問である。

無解答率が高かったのは「変化と関係」の領域で「果汁が25%含まれている飲み物の量を基にしたときの、果汁の量の割合を分数で表す」設問と、「数と計算」の領域で「1年生の希望をよりかなえるためのポイント数の求め方と答えを書く」という記述式の問題である。全体的には無解答率は低かった。

分析

全体的に概ね良好な結果であった。「データの活用」の領域が特に良好な結果で、分類整理されたデータから、全員の希望が一つは通るように遊びを選ぶ問題は、全国平均を大きく上回っていた。また、無解答率が低く、難しい問題にも最後まで諦めずに考えていることが分かる。このことは、普段からの学習に対する取り組み一つ一つの積み重ねが、成果として現れていると思われる。

その反面、アンケートからは「算数の授業で学習したことを、普段の生活で活かそうとする」、「算数の授業で問題を解く時、もっと簡単に解くことが出来ないか考えている」といった項目が、全国平均を大きく下回っており、深く考えたり、活用しようとする姿勢に、課題がある。

授業の中で、自分の考えをノートに書いたり、求め方を筋道立てて説明したりする学習を充実させていくことや、児童が算数の学習に興味・関心を示し、意欲的に活動できるような授業展開の工夫を学校全体で考えていくことが重要である。

理科

(領域ごと)

- | | |
|--------|-------------|
| ①エネルギー | 概ね良好な結果であった |
| ②粒子 | 概ね良好な結果であった |
| ③生命 | 概ね良好な結果であった |
| ④地球 | 概ね良好な結果であった |

(問題形式)

- | | |
|------|-------------|
| ①選択式 | 概ね良好な結果であった |
| ②短答式 | 概ね良好な結果であった |
| ③記述式 | 良好な結果であった |

(無解答率)

概ね良好な結果であった

(その他)

もっとも正答率が高かったのは「生命」の領域で、「見いだされた問題を基に、観察の記録が誰のものかを選ぶ」設問である。一方で、もっとも正答率が低かったのは「エネルギー」の領域で、「光の性質を基に、鏡を操作して、指定した的に反射させた日光を当てることができる人を選ぶ」設問である。

無解答率が高かったのは「エネルギー」の領域で「問題に対するまとめから、その根拠を実験の結果を基にして書く」設問である。全体的に無解答率は低かった。

分析

全体的に概ね良好な結果であった。「生命」の領域の正答率が高く、ほとんどの設問で全国平均を上回る結果となった。また、無解答率が全国平均と比べて低く、どの設問にもしっかり考えて解答することができていることがわかる。特に記述式の設問の無解答率は全国的に高くなっているが、本校の結果は全国平均と比べると低かった。このことは、普段の授業から問題に対して自分の考えを書くことができていることが結果として現れていると思われる。

児童アンケートの結果を見ると、「理科の学習は好きですか」という設問に多数の児童が肯定的な回答をしている。また、「理科の授業では、観察や実験の結果から、どのようなことが分かったのか考えていますか」の設問に対しても肯定的な回答が得られている。このことから、普段の学習から意欲的に取り組むことができていることがわかる。また、観察や実験を行った後に結果から何がわかったか考察できていることがわかる。

今回の結果から、授業の中で予想や考察をする中で自分の考えを書くこと、考えを交流しあうことを引き続き行い、児童が興味・関心を持ち続けられるように取り組むことが重要である。

○●経年比較●○

全体的な傾向についての分析

正答率については、前年を下回る結果となり、平成 31 年度の正答率は平均を下回っていた。令和 3 年度に上昇し、全国平均を上回ったが、今年度は全国平均をやや下回っている。教科別にみると、国語・算数ともに、昨年度の結果を下回った。

学力高位層と学力低位層、エンパワー層についての分析

前年度は、学力低位層の児童の割合が減少していたが、今年度は増加傾向にある。学力高位層についても前年度と比べると減少傾向にある。エンパワー層については、昨年度よりも少し増加しているが、全体で見れば全国平均を少し下回っている結果である。

○●取組み●○

学力向上に関する取組み

1、基礎・基本の定着を図るための全校的な取組みの推進

- ・算数科での反復練習、ドリル学習の取組みをすすめる。
- ・国語科での漢字練習の習慣化、音読、視写の取組みをすすめる。
- ・「家庭学習の手引き」を配布し、家庭学習の習慣化に向けての取組みをすすめる。

2、「できない」「わからない」児童への手立ての工夫

- ・授業の工夫（習熟度別授業、TT指導、ICTの活用等）をおこなう。
- ・「できた」「わかった」など達成感と喜びを味わえる授業づくりをおこなう。

3、「考える」「調べる」「話し合う」「解決する」過程を大切にしたい授業研究

- ・問題解決学習、仮説実験の授業、調べ学習などを取り入れた授業づくりをおこなう。
- ・タブレット、ペアや班、グループでの聴きあい、話し合い活動を取り入れた学びと学び合いのある授業づくりをおこなう。

4、研究授業、公開授業の実施

- ・授業研究部、人権教育部、支援教育部による研究授業・公開授業を実施する。
- ・一人一台のタブレットを効果的に活用した研究授業を実施する。

5、朝の一斉読書

- ・週一回（月曜日）に全校一斉に「朝の読書」をおこなう。
- ・図書ボランティアの方による読み聞かせを実施する。

6、朝の一斉学習

- ・「朝の学習（かきかきタイム）」を実施し、作文の基礎・国語の表現力の育成練習をおこなう。

7、スクールサポーターの活用

- ・学力向上のための個別指導や入り込み指導の取組みをおこなう。

8、学校図書館を活用した国語力の育成

- ・スクールサポーターによる読書活動、図書館活動の支援をおこなう。
- ・学級図書時間を活用し、低学年の読み聞かせ指導をおこなう。
- ・図書委員会を中心に児童に図書館利用を促す活動をおこなう。
- ・読書感想文コンクールなどに積極的に参加し、感想文の書き方等の指導をおこなう。

9、小中連携の強化

- ・小中連携担当教員による情報交流、実践交流をおこなう。